

一本の銀の針

小川未明

青空文庫

一

兄あにいもうとと妹いもうとは、海岸かいがんの砂原すなはらの上うへで、いつも仲なかよく遊あそんでいました。

おじいさんは、このあたりでは、だれ一人ひとり、「海うみの王おうさま」といえば、知らぬものはなほ、船乗ふなのりの名人めいじんでありました。ほとんど一生しょうを海うみの上うへで暮くらして、おもしろいこと、つらいことのかずかずを身みに味あじわつてきましたが、いつしか年としを取とつて、船乗ふなのりをやめてしまいました。

おじいさんに、一人ひとりのせがれがありました。やはり、おじいさんと同じおなように船乗ふなのりでした。ある日ひのこと、家うちに、おじいさんと、女房にようぼうと二人ふたりの子供こどもを残のこして、沖おきの方ほうへと出でかけてゆきました。

おり悪あしく、その晩ばんに、ひどいあらしが吹ふいて、海うみの中なかは、さながら渦巻うずまきかえるように見みられたのでした。家族かぞくのものは心配しんぱいしました。そして、どうか無事ぶじに帰かえつてくれるようにと待まっていましたけれど、ついに、海うみへ出でていったせがれは、それぎり帰かえつてきませんでした。おじいさんは、あのあらしのために、破船はせんして死しんでしまったのだらうと思おもう。

いましたが、女房や、孫たちが、悲しむのをたまらなく思つて、

「どこかへ避難しているかもしれない。もう二、三日待つてみよう。」といいました。

人間というものは、どんな不幸に出あつても、日数のたつうちには、だんだん忘れてしまふものであつたからです。

二日たつても、三日たつても、せがれの乗つた船はもどつてきませんでした。ある日のこと、その船の破片が波に打ち寄せられて、浜辺に上がりました。それを見たときに、どんなにおじいさんは、悲しんでありましょう。せがれの女房はあまりの悲しみから、ついに病氣となり、それがもととなつて死んでしまいました。

二人の子供は、父を失い、母に別れて、そのときから、おじいさんに育てられたのであります。海の上を吹いてくる風が、コトコトと窓の戸をたたく音を聞くと、おじいさんは、それでもせがれが生きていて帰つてきたのではないかと耳を傾けました。また、夜中に、波の音が、すすり泣くように、かすかに耳にひびくと、おじいさんは、せがれの女房のことを思い出しました。それにつけてもおじいさんは、二人の孫たちをかわいがつたのであります。

月日は、いつのまにかたつてしまいました。兄と妹の二人は、仲よく、海岸の砂原

で、白に、黄に、いろいろの花をつんだりして遊んでいますうちに、大きくなりました。
 二人は、両親がなかったけれど、おじいさんがかわいがってくだされたので、幸福でありました。

兄は、だんだん年を取ると、自分もどうか船乗りになりたいと思いました。おじいさんは、大事なせがれが海で死んでから、どうしても孫を船乗りにさせようとは思いませんでした。

「海の王さま」と、おじいさんが、みんなからいわれたということを聞くと、兄は、どうかして自分も船乗りの名人になりたいものだと考えたのです。

「僕は、どうしてもおじいさんをお願いして、船乗りにしてもらいたい。」と、兄は、妹に向かつていいました。

「兄さんが、海へいつてしまわれたら、私はどんなに寂しいかしれない。」と、妹は、はなみだや涙ぐんで答えました。

妹に対して、やさしかった兄は、なぐさめるように、

「あの遠い海のあちらには、不思議な島があつて、そこへゆけば、いろいろの珍しいものがあるというから、それをお土産に持つてきてあげよう。」といいました。

妹は、おじいさんから、その不思議な島の話を聞いていました。海の中にすんでいる獣の牙や、金色をした鳥の卵や、香水の取れる草や、夜になるといい声を出して、唄をうたう貝などがあるというのを聞いていましたから、
「兄さん、私に、金色の鳥の卵と、夜になると唄を歌う貝を、お土産にかならず持つてきてください。」と頼みました。

金色の卵は、鶏にあたためさして、美しい鳥にかえさせようと思つたからです。

「じゃ、忘れずに持つてきてあげるから、おまえもおじいさんに、僕の望みをかなえてもらうように頼んでおくれ。」と、兄はいいました。

妹は、承知して、兄がおじいさんに頼んだときに、自分もいっしょになつて願つたのであります。

おじいさんは、すぐにはうんとはいいませんでした。

「おじいさんを、みんなが海の王さまといつていたということを聞きました。どうか、僕を、第二の海の王さまにさしてください。」と、兄はいいました。

「おまえが、その決心をしてくれるのはうれしいが、またあらしにあつて船がこわれたら、とりかえしのつかないことになつてしまう。」と、おじいさんは、思案をしました。

しかし、ついに、孫^{まご}たちのいうことを許^{ゆる}してやりました。

二

おじいさんは、孫^{まご}がいよいよ船出^{ふなで}をするというので、夜^{よる}もおそくまで起き^おき^おいて、船^{ふね}に張^はる帆^ほを縫^ぬっていました。どんな強^{つよ}い風^{かぜ}に当^あたつても裂^さけぬように、またどんなに雨^{あめ}や波^{なみ}にぬらされても、破^{やぶ}れぬようにと、念^{ねん}に念^{ねん}をいれて造^{つく}っていました。

妹^{いもうと}は、兄^{にい}さんといっしょになつて、船出^{ふなで}の許^{ゆる}しをおじいさんに頼^{たの}んだものの、兄^{あに}の身^みの上^{うへ}が案^{あん}じられてしかたがありませんでした。

「どうかして、兄^{にい}さんが無^ぶ事に、出^でていつて帰^{かえ}つてこられるように。」と、祈^{いの}つたのであります。

その日^ひも、妹^{いもうと}は、兄^{あに}のことを心配^{しんぱい}しながら道^{みち}を歩^{ある}いてくると、さびしいところに小川^{おがわ}が流^{なが}れていて、そこに、狭^{せま}い橋^{はし}がかかつており、一人^{ひとり}のおばあさんが、その橋^{はし}を渡^{わた}ることができずにこまっていました。

だれも、人^{ひと}が通^{とお}らなかつたので、だいぶ長い間^{ながあいだ}ここに、こうしておばあさんは立^たつてい

るものと思われたのであります。

妹は、そのおばあさんを見ると氣の毒になりました。自分がどうかして手でも引いて渡らせてあげようと、そばへいつてみますと、おばあさんは盲目でありました。

妹は、びっくりしました。こんな盲目がどうして、このあたりまで一人でやつてこられたろうかと思われました。

「どんなにか、おばあさん、お困りでしたでしょう。私が手を引いてあげます。」と、妹はいいました。

すると、盲目のおばあさんは、

「どうかおぶつて、渡しておくれ。」と、それがあたりまえであるというような調子で答えたのです。

妹は、ずいぶん横着なおばあさんだと心に思いました。また自分がおぶつては、あぶなくて渡られないからでした。

「お手を引いてあげましょう。」

「いいえ、おぶつてもらいましょう。」と、おばあさんは、頭を振っていました。妹はしかたなく、苦心をして、そのおばあさんをおぶつて、ようよう橋を渡ることがで

きました。すると、盲目のおばあさんは、もう白くなつた髪の毛を探つて、その中から一本の銀の針を取り出しました。

「この針は、不思議な、どんな願いごとかなう針だから、これをおまえさんにお礼としてあげる。けつして、みだりに他人にやつたり、見せたりしてはならぬ。」といつて、おばあさんは銀の針を妹にくれました。

妹は、喜んで家に帰りました。そして、その晩に、おじいさんが帆を縫うてつだいをして、おばあさんからもらった銀の針で、どうか兄さんが無事に帰つてくださるようにと祈りながら縫いました。細い銀の針では、厚い布がよく通りそうもないのに、よく通りました。不思議な針だから、きつとおじいさんの造つてくださった帆は、けつして、風にも、雨にも、破れないであろうと思ひました。

三

真つ白な帆が、でき上がつて、それが船に張られたのです。そして、ある朝、若者は、妹や、おじいさんに見送られて、この海岸から沖をさして船出したのであります。

だんだん沖へ、沖へ出ると、そこはものすごい景色でありました。白い波は、いままで自分たちばかりの遊び狂うところだと思つていたのに、真つ白な帆をかけた船が、中へ割り込んできたものだから、びつくりしました。

「この世界は、おれたちの世界だ。それなのに、おれたちよりもつと白い大きなものが、頭の上を平気で踏んでゆくとはけしからん。」といつて、波は騒ぎたてました。

いくら波が騒いでも、昔、海の王さまといわれた、おじいさんの孫の乗っている船は平気でありました。波の上を越して、もつと沖へ、沖へとこいでゆきました。

「あちらの島に着いて、金色の卵、夜になるとおもしろい唄をうたう貝を拾つてきて、妹への土産にしよう。自分がこの航海を無事に終えたら、もうりっぱな船乗りだ。いつか、海の王さまの後継ぎだという評判がたつであらう。」と、若者は、そう思わずにいられたかったです。

波は、いくら騒いでも、どうすることもできませんでした。そのとき、空を風が通りかかった。波は、日ごろはあまり仲はよくなかったけれど、こんなときは味方になつてもらうと思ひましたから、風を呼び止めて、

「あんな小さい船のぶんざいで、私たちの世界をかつてに乗りまわすなんて生意気じゃあ

りませんか。沈めてしまおうと思うんですが、私たちの力ばかりではだめですから、ひとつ助けてください。」と頼みました。

風は、そういつて頼まれると、いやだとはいえなかった。それに、自分がひとあばれしてみたいと思つていたやさきでありましたから、

「よろしい、大いにあばれてみましょう！」と、ただちに受け合ふと、もう、高く怒り声をたて、白い帆を張つた小船に向かつてぶつかりました。小船は、木の葉のように波の上でほんろうされていました。

若者は、おじいさんもかつて、こうしたためにあつて、それに戦つてきたことを思いました。またお父さんは、やはりこんなめにあつて、船がこわれて沈んでしまったのであるうと考えました。彼は、いまこそ自分の力を試すときだと思つて、力いっぱい風と波とに戦つたのであります。

しかし、風の助けを得て、波はますます高くなりました。そして、白い帆の上を越すようになりました。

若者は、せっかくここまでできながら、望みの島に着くこともできず、空しく海底のもくずになつてしまうのかと残念がりました。また岩の上に降りていたたくさん白い

鳥は、波に足場をさらわれてしまつて、あらしの叫ぶ空の中で、しきりに悲しんで鳴いていました。そのうちに、日が暮れてしまつた。

夜になつても、風は、静まりませんでした。波は、はやく船を沈めてしまわなければならぬと、四方から打ち寄せてきました。若者は、おじいさんのことを思い、また妹のことを思い出しました。

おじいさんの造つてくださった帆は、この風にも裂けませんでした。若者は、どこへなりと風の吹く方向へ押し流されてゆこうと、運命に身を委せてしまつたのです。

あたかも、暗い雲を破つて月が照らしました。月は、海の上をくまなく、ほんのりと明るくしました。そのとき、白い帆の端で、異様な輝きを放つたものがあります。船の中で頭を抱えていた若者には、それがわからなかつたけれど、目ざとい風はすぐにそれを見つけました。妹が、兄さんの無事を祈るために、盲目のおばあさんからもらった銀の針を、だれも気のつかないところに刺しておいた、それに月が映つたのであります。

風は、その光を見てびつくりしました。その光の中に、あの怖ろしい盲目のおばあさんが、じつとしてすわっていたからでした。

盲目で、白髪のおばあさんは、北極の氷の上にいるおばあさんです。波でも、風

でも、おばあさんの住^すんでいる国^{くに}へいったものは、おばあさんの機嫌^{きげん}しだいで、すぐにも息^{いき}の音^ねを止^とめられたり、また凍^{こお}らせられたりするのでした。

あらしは、おばあさんを見^みると、ぴたりとやんで、ここそとどこへか逃^にげてゆきました。波^{なみ}もまた静^{しず}かになつてしまいました。こうして、若^{わか}者^{もの}は無^ぶ事^じに島^{しま}を探^{たん}検^{けん}して帰^{かえ}ると、はたして、みんなから、第二^{だい}の海^{うみ}の王^{おう}さまと呼^よばれたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「少年倶楽部」

1927（昭和2）年2月

※表題は底本では、「一一本《ぽん》の銀《ぎん》の針《はり》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一本の銀の針

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>